Misty
ミスティ

Harold Mabern Solo Piano
ハロルド・メイバーン・ソロ・ピアノ

1. ダット・ディア
Dat Dere《 B. Timmons 》(4 : 47)

2. シー
She 《 G. Shearing 》(4 : 27)

3. 煙が目にしみる
Smoke Gets In Your Eyes《 J. Kern 》(4 : 09)

4. メイバーンズ・ブギ
Mabern's Boogie《 H. Mabern 》(2 : 27

5. 追憶
The Way We Were《 M. Hamlisch 》(5 : 05)

6. アンフォゲッタブル
Unforgetable《 I. Gordon 》(4 : 14)

7. あなたは恋を知らない
You Don't Know What Love Is《 D. Raye, G. De Paul 》(3 : 46)

8. チャイルド・イズ・ボーン
A Child Is Born《 T. Jones 》(5 : 13)

9. ウェイル・ベイト
Wail Bait《 Q. Jones 》(3 : 40)

10. ストールン・モーメンツ
Stolen Moments《 O. Nelson 》(4 : 13)

11. ウェインズ・ブルース
Wayne's Blues《 H. Mabern 》(3 : 54)

10. ミスティ
Misty《 E. Garner 》(4 : 54)

ハロルド・メイバーン Harold Mabern 《 piano 》

録音：2006年12月20日　ザ・スタジオ、 ニューヨーク

℗© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in N.Y. on December 20, 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover :© Leonard Freed / Magnum Photos
Designed by Taz

すでに70才を超える年齢でありながら、もっとも脂の乗りきったプレイを聴かせて人気の高いハロルド・メイバーンによる、ソロ・ピアノ・アルバムの登場である。メイバーンの最近のアルバムとしては、すでに「ドント・ノウ・ホワイ」「ファンタジー」「虹の彼方に」をはじめとする、多くの素晴しい作品がヴィーナス・レコードの手によって制作され、リリースされてきた。それらを含めてメイバーンの作品にはトリオ編成のものが多く、ソロ・ピアノ・アルバムを吹き込むというのは彼の長いキャリアの中でも初めてのことなのである。“前にトリオ・アルバムを録音したとき、スタジオでソロ・ピアノ演奏をやってくれて、それがとても良かったんだよね。それでぜひ一枚、メイバーンのソロ・ピアノ・アルバムを作ってみたいと思うようになった。メイバーンの演奏はいつもハートフルで、エモーションが溢れてくる。プレイが高揚してくるのがわかるんだ・・・”と、ヴィーナス・レコードのプロデューサー、原哲夫氏が語っている。

本作「ミスティ」は、ひとことで言えば大きなスケールをもっているソロ・ピアノ・アルバムである。あらためて述べるまでもなく、ピアノはメロディー、リズム、ハーモニーのすべてを奏でることのできる“完全な楽器”である。もちろんソロ演奏でも、音楽のすべてを完璧な形で表現することができるということになるが、それだけにソロ・ピアノ演奏には、プレイをおこなうミュージシャンそれぞれの個性がストレートに現れる。ほんとうの実力をもったプレイヤーでなければ、聴き手の心を揺さぶることができないというのも、また確かなことなのだろう。それだけにジャズ・ピアニストにとってソロ・ピアノ・アルバムを吹き込むというのは、大いなる冒険であると同時に、ひとつの夢のようなものなのかもしれない。アーティストによって、その表現方法やスタイルはじつに多彩。セロニアス・モンクやビル・エヴァンス、キース・ジャレットといった巨匠たちの例を出すまでもなく、優れたプレイヤーであればまさに自在に個性を注ぎ込むことのできるのが、ソロ・ピアノ演奏の世界なのである。

ハロルド・メイバーンは、いかにも彼らしいダイナミックな表情をいっぱいにふりまきながら、ピアノという楽器に立ち向かっている。そのタッチは、どこまでも力強くエモーショナルであり、ひとつひとつのタッチが強い説得力をもって聴き手の心に迫ってくる。ふり返ってみれば、すでに挙げたようなピアノ・トリオ・アルバムでも、比類ないほどのダイナミックなタッチを繰りひろげてみせたのがハロルド・メイバーンだった。そのことが、彼のソロ・ピアノ演奏にもそっくり当てはまる。バックにベーシストやドラマーが居なくても、あるいは居ないからこそ、いっそうメイバーンは骨太のビート感を前面に押し出して、ダイナミックなプレイをおこなってみせるのだ。さながらホールでの演奏を中心におこなうコンサート・ピアニストのようでもあり、その重厚な響きは独自の個性に彩られた“メイバーン・ジャズ”以外の何ものでもない。

リズミックであると同時に、ハロルド・メイバーンの演奏からは、ジャズのルーツであるブルースの香りが強烈に漂ってくる。メイバーンのブルースは、洗練されたブルースというよりも、よりブルースの根源に近づくようなワイルドさをもつものである。テネシー州メンフィスで生まれたハロルド・メイバーンの体の中には、アメリカ南部の荒々しいブルースの血が流れている。ほとんど独学でピアノをマスターしたあと、54年にシカゴへ出て“ＭＪＴ＋3”などで演奏。59年ニューヨークに進出し、“ジャズテット”やマイルス・デイヴィス、ソニー・ロリンズ、ウェス・モンゴメリー、リー・モーガンらのトップ・ミュージシャンたちと共演して、ハード・バップ・ピアニストとして注目をあつめるようになったハロルド・メイバーンが一貫して保ちつづけてきたのが、メロディックであると同時にダイナミズムをもった、この力強い表現力だった。モダン・ジャズ・ピアノの伝統を継承しながら歯切れの良いタッチに磨きをかけて、華麗なテクニックとともにいっそうスケールの大きな演奏を繰りひろげるようになっているのが、近年のハロルド・メイバーンなのである。とくに最近のメイバーンのプレイからは、単なるモダン・ピアノの流れというよりも、より彼の音楽の根源になっているブルースをはじめとするジャズ・ピアノの伝統までを呑み込んだ、おおらかな表情を耳にすることができる。一般的な意味での成熟というよりは、いっそうジャズを深く掘り下げて、懐の深いプレイをおこなうようになっているのが、なんとも素晴しい。

“ソーホーにある“ザ・スタジオ”は小じんまりしていて、とても雰囲気がいいんだ。もう20年くらい経っている古いスタジオで、まもなく取り壊されることになっているんだけどね。それはともかくとして、ピアノに向かったときのメイバーンの集中力は凄いものがあるよ。ほとんどの演奏がワン・テイクでＯＫになって、だから3〜4時間でたっぷりアルバム一枚分を録り終えることができたんだ”と、原プロデューサーが言っている。

“曲目は、ほとんどメイバーンが選んだものだよ。もちろん彼はベテランだし、引き出しをたくさんもっていて、みんな頭の中に入っているからね”と原氏が言うように、ここではお馴染みのスタンダード・ナンバーを軸に、いくつかのオリジナルをまじえた楽しい選曲がなされている。＜ダット・ディア＞は、ジャズ・メッセンジャーズのピアニストだったボビー・ティモンズが、在籍中に作った有名なオリジナル。いかにも黒人らしいファンキーなムードをいっぱいに漂わせたナンバーで、メイバーンも力強いタッチとともに、思いっきり黒っぽいフィーリングを発散させてみせる。＜シー＞はピアニスト、ジョージ・シアリングの作品で、バド・パウェルや最近ではエリック・アレキサンダーが演奏しているものの、滅多にとりあげられることのなかった秘曲。リリカルな抒情美あふれるメロディーが、メイバーンの手によってロマンティックに奏でられてゆく。愛らしいイントロダクションから、ロマンティックなテーマが優しく弾き出される＜煙が目にしみる＞。20世紀のアメリカを代表する名作曲家のひとり、ジェローム・カーンがミュージカル「ロバータ」のために書き、50年代にはコーラス・グループのザ・プラターズが歌って世界的に大ヒットしたナンバーを、ハロルド・メイバーンはメロディーの美しさを大切にしながら、とても大らかに奏でてゆく。そのたっぷりした表現が、とても心地よい。＜メイバーンズ・ブギ＞は、もちろん彼自身のオリジナルで、リズミックな乗りの良いビートで聴かせてくれる。このようにシンプルなブルース・プレイは、メイバーンにとってまさにお手のものなのだろう。途中にリズム・ブレイクを挿みながら、メンバーンは両手を充分に生かして、楽しく弾ききっている。続く＜追憶＞は、マーヴィン・ハムリッシュによる73年の同名映画の主題歌。スローなバラード演奏ながら、リズミックなビート感をはっきり打ち出してゆくのが、いかにもメイバーンらしいところである。バーブラ・ストレイザンドが歌ってアカデミー主題歌賞とグラミー最優秀歌曲賞を獲得した名作が、ぐっとジャジーな雰囲気でよみがえっている。同じことは、＜アンフォゲッタブル＞についても言えるだろう。50年代はじめ、ナット・キング・コールが歌って大ヒットしただけでなく、彼の娘のナタリー・コールが歌って、やはり91年のグラミー賞に輝いた名曲を、メイバーンは彼流のダイナミックな表情でプレイしてみせている。さらに驚かされるのが、＜あなたは恋を知らない＞で、もともとバラードで演奏されることの多いメロディーを、ここでは意表を衝いたリズミカルなアレンジで料理してみせる。ラヴ・バラードのもっているデリケートな個性とはひと味違う、メイバーンのジャズになっているのが面白い。トランペットのサド・ジョーンズによって書かれた＜チャイルド・イズ・ボーン＞は、3拍子の愛らしいナンバー。やはり明快なリズム感を打ち出したうえに、メロディックなフレーズが乗ってくるような個性あふれるタッチで、ピアノという楽器のもっている機能をフルに使ったプレイが素晴らしい。＜ウェイル・ベイト＞は名アレンジャー、プロデューサーのクインシー・ジョーンズが若い頃に書いた作品で、トランペッターのクリフォード・ブラウンが名演を残していた。バップ的な香りが強調されたこのようなナンバーであっても、メイバーンの個性的なピアノ・タッチは変わらない。重厚なハーモニーをベースにした右手と左手のたくみな交錯から、いっそう力強い表現が生み出されてゆく。＜ストールン・モーメンツ＞はオリヴァー・ネルソンの作品で、テーマは16小節のメロディーが2回繰り返されるのだが、即興パートは普通の12小節ブルースとして演奏される。＜ウェインズ・ブルース＞はタイトル通り、サックス奏者のウェイン・ショーターに捧げて書かれたハロルド・メイバーンのオリジナル。どこか親しみやすさをもつテーマからは、ショーターに寄せるメイバーンの敬愛の気持ちのようなものが強く感じとれる。ラストを飾るのは、エロール・ガーナーの名作＜ミスティ＞。ニューヨークからシカゴに向かう飛行機の窓から、霧深い景色をながめていたときにガーナーの脳裡に浮かんできたのが、このメロディー。ハロルド・メイバーンは、たくみなテクニックを織り混ぜながら、ラプソディックにこの名曲を弾ききっている。

岡崎　正通